

災害に学ぶ 文化資源の保全と再生

木部暢子／編

勉試出版

2015/3 328p 20cm 3,200円(税別)

ISBN: 978-4-585-22110-4

本書は、編者が代表とする「大規模災害と人間文化研究」の研究成果をとりまとめたものであり、9編の論文と1編の講演録が収録されている。紙面の関係上、各論文の詳細については記述せずに、大まかな要点をまとめた上で、本書をめぐる論点について提示したい。なお、読者の大半は人文科学を背景とする研究者や実務家の方が多いと思われるが、評者は自然科学と社会科学を含めた総合科学的な立場から防災研究を行っている。そのため他の書評よりも流儀や視点が異なっている可能性がある点についてはご寛容いただきたい。

第一部「震災を語る」では、岩手県大船渡市出身の医師で言語学者の山浦玄嗣氏による講演「津波を超えて闇から光へ」が所収されている。気仙地方で伝わる「ケセン語」の復権をめぐるエピソードから、地域固有の歴史・文化を考えながら支援することの重要性について論じられている。

第二部「死者との対話」には2編が収録されている。林論文では、これまで「災害」の最たる当事者である「死者」に想いを馳せることの意味と、死者や遺族の方の記憶をどう継承するかについて考察している。寺田論文では、阪神・淡路大震災の記念施設である「人と防災未来センター」における展示の演出方法について考察している。

第三部「文化財をレスキューする」には4編が収録されている。葉山論文では、文化財レスキュー活動の展示経緯から、博物館・地域・個人の三者を結ぶネットワークの重要性について論じている。小池・川村論文では、文化

財レスキューによって救出された個人の日記資料の事例から、震災で奪われてしまった生活世界の記憶や物語を再創造するために、断片化されたモノや記憶から、新たな物語を紡ぎ出す必要性について論じている。日高論文では、文化財保護法の観点から文化財レスキューを行う意義と、被災地に文化財を残すことへの意義から、生活文化の記憶を取り戻すための文化財レスキューの役割について考察している。青木論文では、釜石市役所の被災文書のレスキュー事業の具体的な取り組みと、東日本大震災の被災県における史料ネットの調査・支援活動の概要について論じている。

第四部「過去から未来へ」には3編が所収されている。岡村論文では、昭和三陸地震の復興手法から、昭和三陸地震の復興は近代日本における復興のベンチマークとなっていることを指摘している。金論文では、大災害によって支援が行き届かない可能性がある外国人に対する災害時・通院時での情報伝達の課題とその実践事例について論じている。西村論文では、民間所在資料を取り巻く状況と、郷土史が民間所在資料に対して果たした役割について提示した上で、救済した民間資料を継承するための論点について提示している。

ここまで見てきた本書の大まかな内容を踏まえて、本書から学ぶべき三つの論点について提示したい。

(1) 普遍的な「正解」の反省

本書全体を通して、防災や復興に普遍的な「正解」を求めることに対する負の部分の考慮しなければならないことを考えさせられた。防災・減災あるいは復興研究を行うと、どうしても普遍的な正解を求めようとするきらいがある。その最たる例が、防潮堤の高さである。地域固有の文化や歴史に関係なく、基本的には地震・津波のシミュレーションの結果を用いて算定される。もちろん、それにより普遍的にハード中心の防災対策が全国的な広がりを見せる点で大いに寄与する。しかしながら、東日本大震災における今日的課題の多くは、そこに住む人々や地域固有の歴史・文化をあ

まりにも考えずに、画一的な正解を押し進めようとしてきたためではないだろうか。このことは、第一部の本文中に例示している「しゃあないわ」という言葉一つとっても言い当てられる。大阪弁であれば、無気力で投げやりな言葉として一般的に使用するものの、東北であれば力強い決意の意味を表す言葉である。我々はそのことを知らずに大阪弁の意味からだけで推し量ろうとしてしまい、東北に対する誤った捉え方をしてしまうとのことである。まさに山浦氏が述べている「軽々しく自分の文化で評価してはいけないのです」という言葉からも、これまで防災・減災や復興を考える際に同一の尺度ばかりで地域を捉えすぎてきたように思う。「相手はどういう物差しを持っているのかということを生懸命に探っている」という視点が、防災や復興において必要であることを本書から再認識させられた。また、第四部の金論文で提示されていた災害時には弱者となり得る「外国人」のように、災害時に見過ごされてしまう人々や文化に対する配慮も見直す必要があるだろう。

(2) 歴史的な視座を持つ必要性

東日本大震災で生じている今日的課題について、東日本大震災の被災地のみをとりあげて解決を図ろうとする傾向にある。これでは意味をなさず、過去の災害や被災地の事例についてもっと敬意を払うこと、いわば歴史的な視座を持つ必要性を本書は教えてくれる。

このことの例として、第四部の岡村論文では、国家官僚主導や事業メニューに基づいた昭和三陸地震の復興が、東日本大震災の復興手法と類似している点が少なくなく、災害復興手法の起源として位置づけられることを指摘し、昭和三陸地震の復興手法から考えるべきことは多いことを示唆している。

(3) 架橋の必要性

最後の論点として、立場を超えて架橋することの重要性についてである。特に第二部の二編からは、「死者」や「遺族」の方と架橋する意味について大いに考えさせられた。防災研究における最たる目標は、当然のことで

はあるが、災害から「死者」を出さないことである。それにも関わらず、無名の死者を数値的に減らすことに注力するあまりに、個人としての「死者」と「遺族」に想いを馳せる機会が少なかったのではないだろうか。林論文では、震災によって局所的に命が失われた空間を遺す意味について論じているが、防災研究者が死者や被災者を少しでも減らすための対策を進めるだけでなく、個的な「死者」や「遺族」と対峙し、死者や遺族の想いを馳せる「場」や展示のあり方についても検討しなければならないだろう。

また、防災研究者と文化に関わる研究者同士がお互いの立場を超えて架橋する必要があると考える。本書では、文化・歴史の視点を抜いて防災や復興については考えられないという立場を貫いているが、防災研究者である評者もその点について大いに同意できる。第三部で示されている文化財レスキュー活動の事例から、文化財に関わる研究者と防災研究者とが架橋すれば、東日本大震災の復興だけでなく、今後の防災のための文化財や被災資料を活用するための新たなアイデアや実践手法が生み出されるのではないだろうか。

これまでの防災や復興研究の視座を拡げる本書は、文化に関わる関係者だけでなく、防災研究者や防災の実践に携わっている方にも勧めたい一冊である。本書を通して、防災研究者・実践者と文化に関わる研究者・実践者とが架橋し、新たな展開が創発され、より良い防災・復興につながることを切に願う。

人と防災未来センター 石原凌河